

保護司の祖母のお手伝い

太田市立太田中学校 三年 大塚さな

私の祖母は保護司である。明るい地域社会を目指し、犯罪を起こした人の更生に関わっているのだ。その話を聞いたとき、正直やめてほしいと思った。なにか恨みをかったらどうするのか、怖い、そういった感情を持っていた。

その感情が憧れへと変わったのは、祖母の家でお手伝いを頼まれたときだった。祖母は料理が得意で私は祖母の料理が大好きなためいつものように料理の手伝いをするのだと思っていた。ただその日は様子が違った。祖母はいつもより気合が入っていて楽しそうだった。いいことでもあったのかな、そんなことを考えながらなにを作るのか聞くと、明日は施設にいくから下準備を手伝って、と言われた。その施設とは犯罪者が更生するための施設でその時私は初めて祖母が保護司になっていた事を知った。私は怖いからやめてほしい



と伝えたが、祖母はそんなことないよと私が言った言葉を否定した。下準備をしながら不安で仕方がない私はたくさんのことを質問した。祖母は一つ一つ優しく答えてくれた。たくさんの事情を持った人たちが集まる場所であること。あたたかい人達がたくさんいること。新しい人生を歩もうと努力している人がたくさんいること。ほかにも私の思っていたこととは全く正反対の事を話してくれた。その人たちと明日はみんなでご飯を食べるんだよ、祖母は本当にうれしそうにはなしていた。なんで保護司になろうと思ったのかを聞くと、家にいるだけじゃつまらないし人の為になることがしたくなっただ、保護司は絶対誰かの心に残る仕事なんだよ。だから保護司は素晴らしい。と生き生きと語っていた。

今までの私の偏見とはかけ離れた話に感銘を受けたのを今でも鮮明に覚えている。祖母は保護司という仕事にとってもやりがいを感じているようだった。下準備の空き時間、犯罪



をしてしまった人の更生について調べた。そこには更生に関する問題がたくさん記されていた。特に印象に残ったのは、あまり受け入れてくれる施設や職場がないという問題だった。私のように偏見を持っている人が多いからだろうか。その問題は深刻だった。その仕事に就きたいと思っても就けない。本人はどう思うのだろうか。必死に努力して反省してやり直そうとしているのだ。確かにやったことは足を引っ張っていかもしれない。でも祖

母の職場のようにあたたく、リスタートに向けて頑張っている人にもライトを当ててほしいと思った。これは祖母が保護司をやったいなかったら、こんな考えを持つことはきつと一生なかっただろう。

祖母は保護司という仕事に誇りとやりがいを持っている。人の為になることなんでもっとたくさんあるのだ。でも私の祖母が保護司という仕事についたのは他でもない理由があったのだろう。祖母が願うように人生をリス

タートする人を応援できる、そんな明るい世の中になることを心から願っている。そんな思いを込めていつもより力を込めて祖母の隣で下準備を進めた。